旅への誘い

アラル海に注ぎ込む大河アムダリヤとシルダリアにはさまれた地は古来、ソグディアナと呼ばれてきた。ゾグド人の土地という意味である。この地は肥沃であったため古くから灌概農業が発達し、さらにシルク＝ロードの要衝にもあたることから、サマルカンド、ブハラなどのオアシス都市国家が繁栄した。中心的な都市は両河の中間を流れるザラフシャン川流域のサマルカンドである。

オアシスの農耕民はまた商業の民でもあり、シルクロード周辺域の隊商をはじめとして多様な経済活動を行い、その活動範囲は東ローマ帝国から唐の長安にまで及んだという。

しかし、経済的な基礎の弱いオアシス都市国家群は、周辺地域を支配するような強力な統一国家を形成することはほとんどなく、シルクロードの利益を求める異民族の侵入とその支配をうけることが多かった。今回の旅は、この文明の十字路とも呼ばれるソグディアナの幾世紀にもわたる興亡の歴史と文化の堆積を訪ねる旅である。この地は現在の国名で言えば、ウズベキスタンとタジキスタンにあたる。

歴史を紐解くと、まずこの地にやってきたのはアケメネス朝ペルシャ。紀元前6 世紀のことである。ペルセポリスの「謁見の間」には、この地の民ゾグド人が貢物を持って大王に謁見する場面が描かれている。アレキサンダー大王の東征によりアケメネス朝が滅亡してヘレニズム時代が訪れると、ヘレニズム国家のひとつであるセレウコス朝シリア王国がこの地を支配した。

余談であるが、アレクサンダーはシルダリヤの岸辺、キュロス市に守備隊を置き、その町の名前を自分の名前にちなんでアレクサンドリアエスカテ（「最果てのアレクサンドリア」）とした。この町は私たちが旅の後半に訪れる現在のタジキスタンのホジェンドである。

しかし、前 250 年頃、アムダリア流域を中心にギリシア系住民がその王朝の支配から独立してバクトリア王国を建てると、ソグディアナはその一部となり、中央アジアにおけるヘレニズム文化の拠点となった。この王国は、前 140 年頃、トハラ（大夏）によって滅ぼされた。

つぎにソグディアナを支配したのは騎馬民族である月氏が建てた大月氏国。匈奴が東西交易の支配を求めてオアシス地帯へと支配を伸ばしたため、月氏は故郷の甘粛・タリム盆地東部を追われてアムダリア流域に移住した。これを中国では大月氏国と呼んでいる。

ついでアム川の南方に成立したイラン系クシャーナ族が、後 1 世紀半ばに大月氏から独立してクシャーナ朝を建国し、北西インドにも版図を広げた。この王朝に 2 世紀半ばに登場したカニシカ王は仏教の保護者としても知られ、ガンダーラ地方を拠点に、ソグディアナから西北インドに加えてガンジス川中流域までを統治する大帝国を築いた。

しかし、3 世紀に入るとクシャーナ朝は西方のササン朝ペルシャにソグディアナを奪われて衰退し、5 世紀には遊牧民エフタルよって最終的に滅ぼされた。この遊牧民は 6 世紀初頭までオアシス地帯一帯を支配したが、6世紀なかばにモンゴル高原を支配するトルコ系の突厥と、西アジアで全盛期を迎えていたササン朝ペルシャに挟撃されて滅亡した。

突厥は、アルタイ山脈の西南から出てモンゴル高原・オアシス地帯を支配する大遊牧国家を建設したが、6 世紀末ごろ東西分裂し、ソグディアナは西突厥の支配するところとなった。西突厥は 657 年全盛期を迎えていた唐によって攻撃され、7 世紀末に壊滅した。

8世紀になるとまもなく、西アジアのイスラム王国であるウマイヤ朝がソグディアナを支配した。ゾロアスター教徒のソグド人は、ウマイヤ朝下でイスラム教に改宗していったが、この動きは 750 年にウマイヤ朝を打倒して開かれたアッバース朝が、タラス河畔の戦いで唐を破ってから決定的となった。その後、イスラム教圏に入ったソグディアナでは、874 年にイラン系イスラム王朝のサーマン朝がアッバース朝から事実上独立し、10 世紀末まで繁栄した。

ソグディアナの地はやがてイラン系民族の居住地域からトルコ系民族の居住地域へと変化していく。中央アジアがトルキスタンと呼ばれるのもこの頃からである。やがてトルキスタンにはカラ＝ハン朝が建国し、サーマン朝は 999 年に

滅亡した。西アジアで強大となったトルコ系のセルジューク朝は、1055 年バグダードに入ってイスラム帝国の支配者となると、西トルキスタンはこの支配下にはいる。

12 世紀初頭、モンゴル高原で勢力を誇った契丹族の遼が金によって滅亡すると、その王族であった耶律大石は中央アジアに逃れてカラ＝キタイ（西遼）を建てた。この王朝は一時トルキスタン全域を支配下に入れたが、12 世紀後半になると急速に衰退した。13 世紀初頭の時点で西トルキスタンを支配したのはホラズム王国であった。

ここに登場するのがチンギス＝ハンである。モンゴルを統一し、西進したチンギスはホラズム王国を攻略してトルキスタンの地を手中に収め、第二子チャガタイにトルキスタンの支配をゆだねた。チャガタイ＝ハン国は 14 世紀半ばに東西に分裂したが、その後、西チャガタイの内紛に乗じて、台頭したのが梟雄ティムールであった。

ティムールはサマルカンドを都に定め、オアシス諸都市の経済力を有効に活用したため、都のサマルカンドは空前の繁栄を極めた。ティムールは東西トルキスタンを統一すると、西進してイル＝ハン国の領土を併せ、さらにキプチャク＝ハン国や北インドに侵入した。さらに、当時アナトリアから台頭してきたオスマン=トルコを 1402 年に撃破し、その皇帝バヤジット1世を捕虜とした

ティムールがイラン人の世界とトルコ人の世界とを統一したことにより、イル＝ハン国で成熟とげていたイラン＝イスラム文明が中央アジアにもたらされ、トルコ＝イスラム文明として発展した。

15 世紀末、シルダリア流域のトルコ系遊牧民ウズベク人が強勢となると、ティムール帝国を滅ぼしてシェイバニ朝を建てた。さらに 16 世紀末シェイバニ期が滅びてジャーン朝、ボハラ＝ハン国が興り、アムダリア下流のヒヴァ＝ハン国と並立して西トルキスタンを支配した。また、18 世紀にはフェルガナのウズベク人がコーカンド＝ハン国を建国し、この三つのハン国は長くその命脈を保ったものの、ロシアがボハラ＝ハン国に続いてヒヴァ＝ハン国を保護国とし、1876 年にはコーカンド＝ハン国を併合した。

三千年にも及ぶゾグディアナの歴史を A4 で 3 ページにまとめるのは容易なことではない。目が回るような民族の興亡の歴史であるが、まさにこれこそが「世界史」なのである。東と西、北と南が激しく衝突し、混じり合い、受容しあい、

歴史は生まれてゆく。それまでは歴史は、「東洋史」であり「西洋史」でしかなかった。

「ウズベキスタン＆タジキスタン 17 日」の旅はゾグディアナという文明の十字路に今も残る数々の歴史遺産を丹念に訪ね歩く旅である。

私たちは時間的にも空間的にも限られた高々百年の人生を生きるしかない。しかし 21 世紀に生きる私たちは、簡単に空間を移動し、異なった生き様を持った人々に合うことができる。幾世代にもわたる歴史遺産に触れ、過去へ思いを飛ばすことができる。二つの時代を、二つの空間をひとりの人間が生きることはできないが、旅に出ることによってその疑似体験が得られる。

旅はそのためにある。美しかった、楽しかった、おいしかったと振り返る旅もいいだろう。しかし、「私たちはどこから来てどこへ行くのか」「私とは何者か」に思いを巡らす旅もあっていい。歴史の坩堝のようなゾグディアナの地で、何を見るかはあなた次第なのだ。

fujizakura